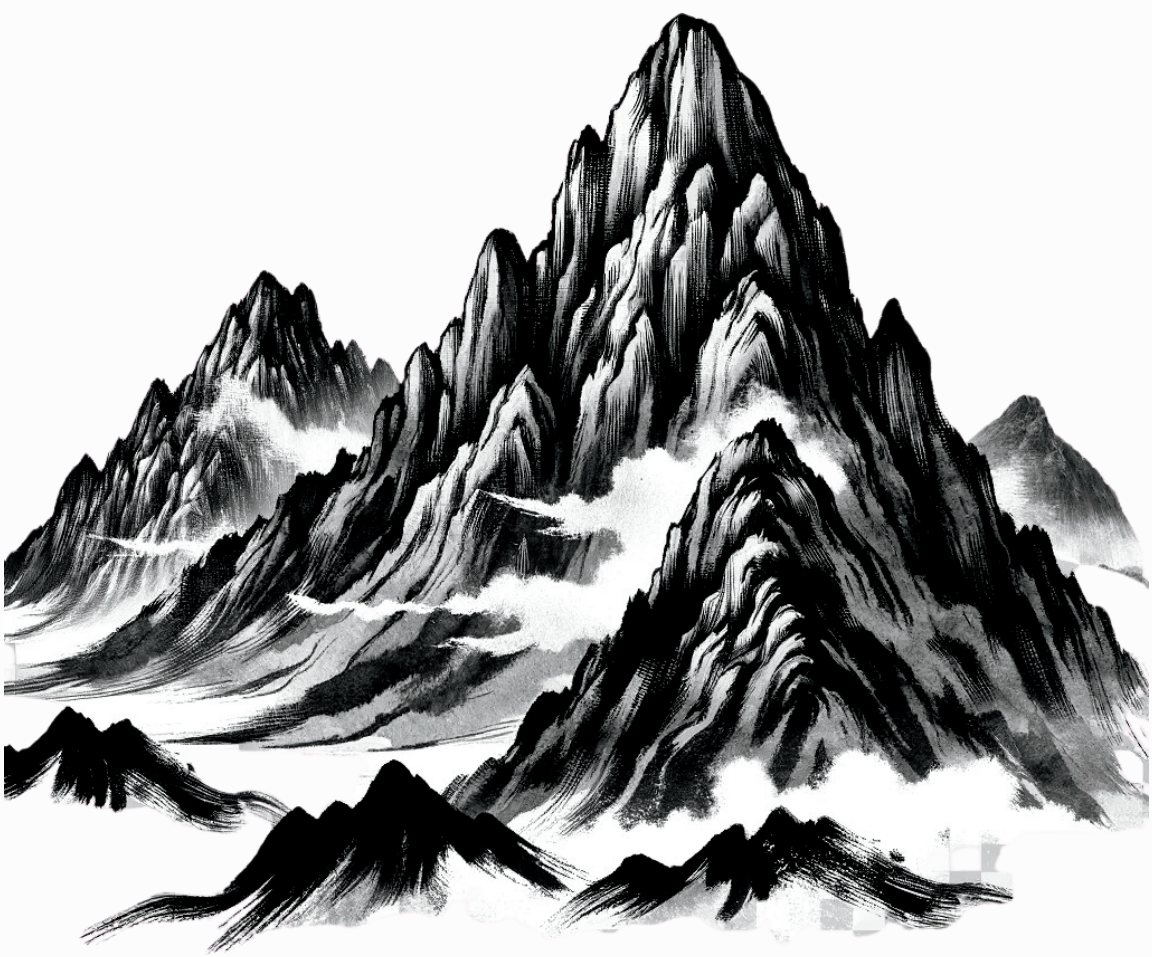
白狐の蒼と五つの長老の樹

白狐の蒼と五つの長老の樹

作：樋尾　重樹



昔、むかし、

まだ動植物が「人」よりも大きく「人」の言葉を話せた時代。

神様が住む天界から一番近い山々にお稲荷さんを祀った
古いお社と、そのまわりを囲むように樹齢数百年の
五本の大木が精霊を宿し、山々の平和を守っていました。

ある時、長寿である長老たちも経験をしたことのない

激しい嵐に山々は襲われました。

荒々しく雷が鳴り響き、木々や植物が突風で薙ぎ倒され、

増水した川にはたくさんの動植物が飲みこまれていくような

凄まじい嵐が一週間も続きました。

「バリバリバリ！ ガシャァ〜ン！」

黒い雲の間から太陽の光が差し込み、

お社の前に雷が落ちました。

長老たろが雷の落ろたところを覗き込んでみると、

煙の中から絹のように滑らかな白色の毛に、

瞳が海のように蒼い狐の子どもが産声をあげていました。

最長老がその子狐を持ち上げて言います。

「神様からの贈り物じゃ。皆で大切に育てよう！」

子狐は、瞳が蒼かったことから

名前を「蒼」（あお）と名付けられました。

蒼は長老たろから、走り方や生きていく為に

必要な事を学び、スクスクと成長していきます。

そんな蒼には毎日楽しみにしていることがありました。

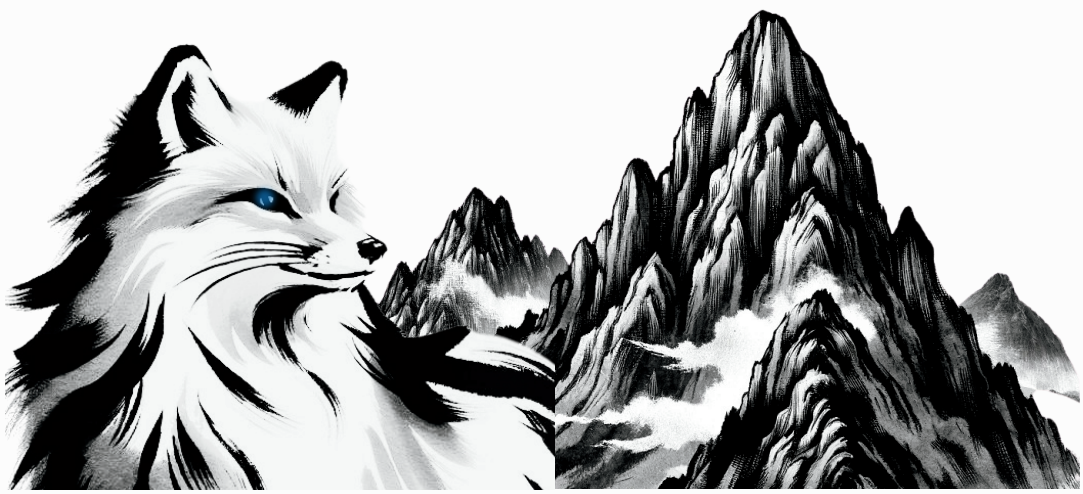
それは山の頂上から下界にいる、いろんな動植物を

眺める事です。今日も、知らない動植物が見えます。

「あの２本足で歩いている、「人」と言う動物に会ってみたいな」

そのうちに蒼は山を下りて、旅に出たいという

好奇心が芽生えていきました。



その日の夜、長老たちに言います。

「山頂から下界を眺めていると、

僕には知らない事が沢山あるんだよ！ 旅に出てもいいかな？」

そうすると最長老が言いました。

「蒼！生きていく為に必要なことは全て教えたのじゃが、

まだ『心構え』を教えとらん。

『心構え』を教えるから、それから旅に出なさい」

しかし、蒼は下界へ行くことへの好奇心が抑えきれず、

体力に自信もあった為、決意は変わりません。

翌朝、旅立ちの準備をしていた時に長老がやってきます。

「この先、辛い事もたくさんあると思うが、

ちゃんと帰ってくるんじゃよ。

お前の家はここなんじゃから」と言い、頭を撫でてくれました。

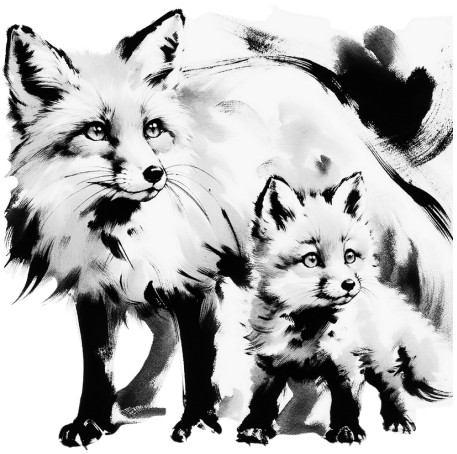
蒼(あお)は、意気揚々(いきようよう)と旅立(たびだ)ちます。

森の中を走っていると、お母さん狐と子狐に出逢いました。

蒼は立ち止まり、その狐たちから少し離れた場所で見ていました。

そうすると、

「ねぇお母さん、あの白くて大きな動物も同じ狐さん？」



「あれは狐に似ているけれど

私たちの仲間ではないわね。

危ないから早く離れましょう！」と言い、

蒼を睨みつけるような眼をして、

その場を立ち去っていきました。

蒼は同じ狐なのに「仲間」ではないと言われ、

初めて寂しいと感じました。

とぼとぼ歩いていると、次は猿の集団に出逢いました。

猿たちは蒼を見るなりコソコソと話をします。

威勢の良い子猿が、「おーい、そこのデカいヤツ！

お前がいると気持ち悪いから早くあっちに行けよ！」

と言い、木の上から石や木の実を投げつけてきました。

「あぁ。また仲間外れかぁ。

本当の仲間や友達が欲しいな」と寂しくなります。

蒼は水を飲む為に池に立ち寄りました。

水を飲んでいると、河童が池の中から顔を出して言います。

「お前は何という動物だ？動物なら泳げると思うから、

お前も泳いでみろよ！」

蒼は山育ちなので泳ぎ方を知りません。

すると、

「泳ぎ方も知らない動物は俺たちの仲間じゃねーな」と言われたので、

蒼は勇気を出して池に足を踏み入れていきます。

でも、どのように泳げばよいのかわからず、

結局、溺れてしまいました。

河童はその姿を見て、ワハハと笑いながら

池の中を泳いで去って行きました。

蒼は手足をバタバタさせ、

なんとか岸辺に辿り着くことができましたが

誰も助けてくれないことに、

また寂しさを感じました。

しかし「人」という動物がいる人里まで

行きたい気持ちを思い出し、蒼は旅を続けます。

森の中を抜け、

人里に通ずる山道に出ました。

ゆっくり下っていくと

鹿や猪の毛皮を纏った大きな

「人」と出くわしました。

胸が高鳴り近寄ると...「わぁ、化け物！こっちへ来るな！」

と、蒼に向かって叫び同時に銃声が鳴り響きます。

その銃弾は蒼の頬をかすめ血が滴ります。

蒼は怖くなり、森の中へ逃げますが、

気が動転し、何が起こったのかわかりませんでした。

ただ、憧れていた「人」という動物は、

蒼の想像とは全く違っていました。

蒼は湯治場へ向かいます。

動植物が怪我や病気をした時に訪れる所です。

そこに生えている薬草を傷に塗り、

温泉に浸かると怪我や病気が治ると言われているのです。

今日もたくさんの動物たちが治療をしていました。

やはり蒼のことを見ると怖くて逃げてしまう動物たちもいました。

「どこに行ってもぼくは仲間外れなんだな」と

思いながら、薬草を頬の傷に塗り温泉に浸かると、

ウトウトし始めました。

すると、目の前に蒼よりも大きく、

黒々と艶やかな毛並をし、血のように赤い瞳をした

動物が蒼のことを見下ろしていました。

蒼はハッとして本能的に臨戦態勢に入りましたが

よく見ると、この動物の右目は怪我をしていて、

見えていないようでした。その黒い大きな動物は言います。

「お前は狼か？ここに何をしに来たんだ？」

「僕は狐。「人」に興味があって天界に一番近い山から
ここまでやって来たんだけど「人」に近づいたら、
急に何かが飛び出てきて、怪我しちゃったんだ」

「俺は狼のクロだ！種族は違うけど俺とお前は
似た者同士だな。俺のこの目も「人」が撃った鉄砲
という道具でやられた。だから俺は「人」が嫌いだ」

それから蒼とクロは温泉に浸かったり、
木の下で寝転んだりしながら語り合いました。

クロは「お前は今日から俺の仲間だ。
これからは俺についてこい！」と言います。

生まれて初めて出来た「仲間」に、
蒼は嬉しくなりました。

蒼とクロの山での生活が始まります。

クロは生きる為の知恵を教えてくれました。

「人」が仕掛けた罠の見分け方や家畜の襲い方

「人」が作った農作物の盗み方まで。

クロは蒼のことを「相棒」と呼んでくれるので、

蒼は嬉しく、クロのことが好きになっていきます。

しかし蒼は「人」への恐怖はあるものの、

今でも「人」への

好奇心は消えませんでした。

「人」から見れば

蒼とクロは天敵です。

今日も人里では蒼とクロについての話し合いをしています。

「あの黒色と白色の狼は手に負えない」

「わしの所では飼っていた鶏を全部やられた」

「俺の所は農作物を喰い荒らされて、売り物にもならねぇ」

村民は蒼とクロを追い出そうと計画します。

「人」は松明を持って蒼とクロの塒の周りを囲み

火を放ちました。

みるみるうちに火の渦で囲まれ、炎と煙が襲ってきます。

「憎き「人」ども。

俺の右目だけでは足らんと言うわけか。ガルルル〜」

クロは牙をむき出し、

瞳の色が一段と赤く染まっていきました。

クロは蒼に言います。

「人はずる賢い動物だ。

炎と煙に巻かれ苦しくなった時に外に飛び出すと鉄砲で

狙ってくるはずだから、今は我慢しろよ！」

蒼は塒の近くにある水溜まりを思い出し、

水汲みを口に咥え、炎の元まで行き、水を何度も掛けます。

すると一本の逃げ道が出来ました。

その瞬間、クロは走って「人」に襲い掛かります。

慌てて蒼も走り、クロと「人」の間に割って入ります。

クロは臨戦態勢であった為、蒼の喉元を噛んでしまいます。

同時に「パァーン」と銃声が鳴り響き

蒼のお腹に当たりました。

絹のように滑らかで真っ白な毛は赤色に染まり、

血がドクドクと吹き出していくので、

「人」は怖気づき立ち去っていきます。

クロは蒼を見下ろしながら言いました。

「お前は「人」の味方をしたな。

もともと俺はお前のことを仲間だとは思っていない。

利用できると思ったから一緒にいただけだ。この役立たず！」

クロは蒼を置いてその場から立ち去ってしまいました。

蒼は、心にも深い傷が出来てしまいました。

血も大量に流れ意識が朦朧とする中、

蒼よりも大きな白狐二匹が現れます。

その大きな白狐は蒼を背中に乗せて、走り出しました。

背中から伝わるなんとも言えない優しさと温かさ。

「お父さんやお母さんがいたらこんな感じなのかな」

目を開けると、神様が住む天界から一番近い

お稲荷さんを祀った古いお社の前にいました。

長老たろがつきっきりで看病をしてくれたおかげで

蒼は徐々に体力を回復し、身体の傷も癒えていきます。

しかし、傷ついた心はなかなか元に戻らず、

元気のない蒼を長老たろは心配します。

ある日、蒼は旅に出てからの話を初めて長老たろにしました。

親狐と子狐の話、サルと出逢った話、

河童と遭遇した話、「人」に鉄砲で撃たれた話、

クロという狼と共に生活した話、大きな白狐が

助けてくれた話。そして、長老たろの忠告を

聞かずに旅に出たことを詫びました。

長老たろが言いました。

「本当に辛い思いをしたの。大きな白狐はきっと

神様の使いか、蒼の父さん、母さんじゃろな」

「蒼や、わしらは家族じゃ。

お前がいない間は皆、心配しておった。

酷い怪我をして戻ってきた時には肝を冷やしたわい。

わしらの命で良かったら蒼を助ける為に

使ってほしいと祠の神様に何度もお願いしたんじゃぞぉ！」

蒼は初めて家族という存在の意味と大切さを知りました。

血が繋がっていなくても、絆が一番大切であることを

深く理解し、自覚した瞬間、心が軽くなるのを感じました。

蒼は長老たちに言います。

「僕、長老たちの為に何かしたい」

最長老が笑いながら言いました。

「さっきも言ったじゃろ。家族なんだから楽しく

過ごせればええのじゃ。でも旅に出る前に話した

『心構え』の事を憶えておるか？ 我々長老の樹には

名前があってのぉ、それぞれ意味があるのじゃ。

この『五つの気』をお前に授けることにする」

「わしの本当の名は、気配り長老じゃ。

山々に住む動植物が安心・安全に過ごせるよう、

気を巡らせ行動することが使命じゃ」

「私の本当の名は、気遣いばあちゃんなのよ。

最長老の気配りは山全体の動植物。

私は山々に住む 動植物一人

ひとりが平和に過ごせるよう気を遣うことなの」

「俺の本当の名は、気働き長老と言うんじゃ。

相手が思う事を予測して先に行動すること。

つまり痒いところにも手が届く、そんな行動じゃな」

「私の本当の名前は、一団和気の長老と言うんじゃよ。

朗らかな雰囲気で団結、協力し合えるようにすることが

使命じゃ。但し仲良くするだけではダメじゃ。

時には相手のことを思って真剣に叱ることができる

団結というところが肝なのじゃよ」

「私の名前は意気長老じゃ。簡単に言うとやる気じゃな。

何でも前向きな気持ちで日々努力を重ねる。

そして、使命感と覚悟を持って山々の動植物を守ることが

肝心なのじゃ」

まず蒼は山々を駆け巡り動植物たちに笑顔で挨拶をし、

何か変わった様子がないか、

困りごとがないかを聴き回りました。

すると山々に住む動植物は、

声をかけてくれる蒼を怖がることがなくなり、

逆に蒼を頼りにお社まで訪れる動植物が増えていったのです。

ある日、旅路で出逢った親子狐に遭遇しました。

子狐は出逢った時よりも

ふた回りほど大きく成長していました。

すると母狐が蒼に寄ってきて、

少し言い辛そうに

「あの時は酷いことを言ってごめんなさい。

あなたの身体が凄く大きかったから、

子供に何かあってはいけないと思ってしまって」と

頭を下げる母狐に蒼は言います。

「当然のことだと思います。

ですから、頭を上げてください」

今度は子狐が言います。

「ねぇねぇ、蒼はこの山に住む動植物が

安全で安心して暮らせるよう、

パトロールをしてくれているんだよね！

僕も大人になったら、お兄ちゃんみたいになりたいな」

蒼は照れながら答えます。

「何だか恥ずかしいけど、とても嬉しいよ。

きっと君なら僕よりも素晴らしいパトロールが出来るよ！」

今日はいつも洞穴を塒にしている狼の所へ向かいます。

狼はいつも独りぼっちで

山々の動植物からも忌み嫌われていました。

蒼がこの狼のところに行くようになった

理由は、昔の自分と似ているから。

最初は「うるさい！ あっち行け！」と、

言われていましたが、何回も通ううちに

少しずつ会話するようになり

仲良くなっていきました。

狼の所へ着くと、

狼は洞穴の中で苦しそうに蹲っていました。

蒼が「どうしたんだい？」と声を掛けると

呻くような声で

「人里にあった物を食べたら、その中に白い硬いものが

入っていて」と言った途端、気を失ってしまいました。

蒼は全速力で長老たちの所へ戻ります。

長老たちの所へ着き、狼の状態を伝えます。

長老が「それはたぶん毒じゃな。人里の家畜や畑を
荒らされないように分かり易いところに食べ物を置き、
その中に毒を仕込むんじゃよ」
蒼は言います。
「どうしたら治るのか、教えてほしい！」
すると長老は
「昔お前がよく行っていた山の頂上の横に崖があるじゃろ。
その崖に紫色の花が咲いている植物があるんじゃが、
それを煎じて一週間飲ませると治ると思うが、
あの崖は急斜面で危ないんじゃ」
と教えてくれます。

蒼は急いで山の頂上へ登ります。

山の頂上に着き、横にある崖を覗くと崖の中腹あたりに

紫色の花をした植物が微かに見えました。

崖は想像よりも急勾配でしたが、

勇気を振り絞りゆっくりと崖を降りていきます。

やっとの思いで崖の中腹に着くと、

辺り一面に紫色の花が咲いていました。

蒼は花を口に咥えて崖を登り始めます。

もう直ぐ頂上というところで

足場の石が崩れ、蒼の身体も地面に

真っ逆さまに落ちていきます。

蒼も何とか崖に生えている木の枝や石に

手を掛けようとしますが、届きません。

絶対絶滅のピンチです。

すると不思議な事に、頂上から樹の蔦が

崖をつたい蒼の身体に巻き付きます。

そうして蒼はその蔦で登り山頂に着くと、

花がある場所を教えてくれた長老がいました。

長老は「蒼、危なかったなぁ。心配で来てみたら、

案の定これじゃ。わしも来て良かったわい」

蒼は、嬉しさと怖さが重なり長老に飛びつきました。

長老は「お前は大事な家族だからな！」と言い

抱きしめてくれました。

「早く狼のところに行って煎じて飲ませてあげなさい！」と

長老に言われ、狼の住む洞穴に向かいました。

直ぐに紫色の花を煎じ、ゆっくりと飲ませます。

そうすると狼も少し楽になったようで寝息をたて始めました。

それから一週間、狼が住む洞穴へ通い紫色の花を煎じ飲ませます。

この花の名は「毒消し草」と言うようです。

すると狼の体調も良くなり、

狼は「嫌われ者の俺に良くしてくれてありがとう。

お前は俺の命の恩人だ。

蒼が困った時は必ず俺が助けるからな」

蒼は狼に

「友達でしょ！ 元気になってよかった」

と伝えました。

とても暑い日、蒼は今日もパトロールをします。

すると水辺から離れた道端に高齢の河童が倒れていました。

昔、長老が「河童は頭の上のお皿が干からびると

死んでしまうんだよ」と教えてもらったことを思い出し、

蒼は走って山から湧き出る石清水を口に含み

河童の頭の皿に掛けてみました。

何度も何度も水を掛けます。

そうすると高齢の河童は意識を取り戻しました。

その河童は無言で頭を下げていて、

その様子で目も見えなく、

喋れないのが分かりました。

ただ耳は聴こえているようでした。

蒼は旅路の途中で河童に逢った池のことを思い出しました。

そこに行けば何か分かるのではと思い、

高齢の河童を背中にのせ、池へと向かいます。

池に着くと河童を発見しました。

以前に出逢ったあの河童です。

河童は慌てた声で言います。

「父ちゃん？

そのでかい生き物に乗っていて大丈夫なのか？」

「君のお父さんなの？

この池からだいぶ離れた場所で倒れていたんだよ。

お皿を湿らせたら元気になったよ」

河童は池から上がって来て

「俺の父ちゃんだよ。父ちゃんは、生まれつき目が見えないし、言葉も喋れない。なのにここが住処ってよく分かったな」

「今まで河童さんと逢ったことがあるのはここだけだったから」

そうすると河童は

「ねぇ、ちょっとそこで待っててくれんかぁ〜」

と言い姿を消します。

しばらくして、

沢山の魚を抱えた河童が姿を現します。

「これ！持ってって。

あん時はちょっとからかい過ぎた。

ごめんなさい。それから、ありがとう」

河童は笹で器用に魚を結び

蒼の背中に笹と魚を掛けてくれます。

「これからは友達でいような！」と言って見送ってくれました。

「友達」と言われた事が嬉しい蒼は笑顔で手を振ります。

山々をパトロールしていると、

今度は小さい子どもの泣き声が聴こえてきました。

蒼は耳を澄ませ場所を探りながら走り出します。

すると大木が倒れ、挟まれている子猿が見えました。

蒼は子猿を助けようと近寄ると猿の集団がいました。

蒼に気付いたボス猿が言います。

「おい、そこのデカいやつ！ あっちに行け！」

この言い方…

旅の道中に、石や木の実を投げつけてきた

威勢のよい子猿だったのです。

その子猿は群れを持つボス猿になっているようでした。

蒼は大木の下敷きになっている子猿のもとへ駆けつけます。

ボス猿に止められても構わず、

その大木に体当たりします。

力一杯、身体をぶつけても大木はビクとも動きません。

猿たちも大木を引っ張ったり、押したりしますが、

やはりビクとも動きません。

「僕だけでは無理だ。

全員で協力しないと動かせない」と蒼は思いました。

そして、ボス猿の所へ行き、子猿を救うための方法を

提案しました。猿たちに蔦を集めてもらい、

大木と蒼の身体に蔦を巻き付け、皆で引っ張る

という共同作戦でした。

ボス猿も「子猿の命にはかえられない！

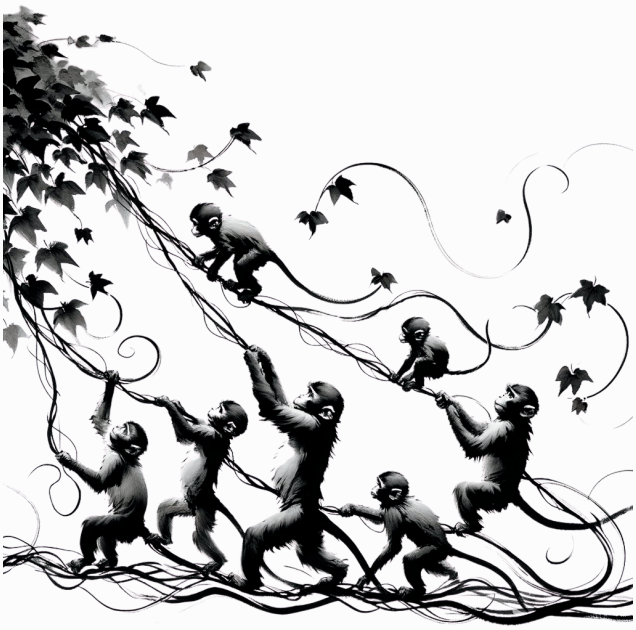
皆、コイツの言う通りにやってみよう。

長めの蔦を急いで探してきてくれ。頼むぞ！」と

群れ全体に声を掛けました。

大木と蒼の身体に蔦を巻き付け、

猿の群れたちも大木を引っ張る準備ができました。



「ソーレ、ソーレ」

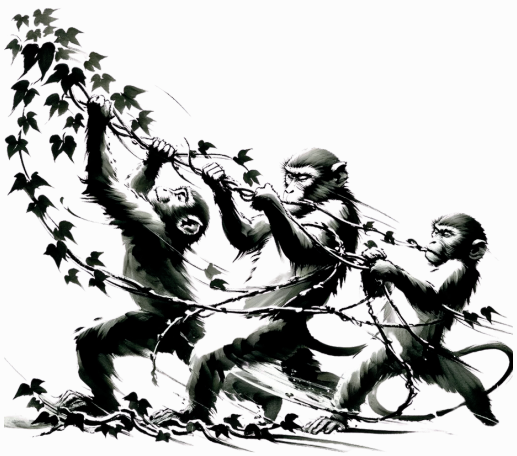
「ソーレ、ソーレ」

大木が少し動いた感触が皆に伝わります。

もう一回引っ張ります。

「ソーレ、ソーレ」

「ソーレ、ソーレ」



何十回も行いましたが、木は動かず、群れの猿たち、

蒼も疲れ果てていきました。

もっとたくさんの協力が必要だ。

そこへ遠くから凄い勢いで走ってくる動物がいました。

洞穴に住む狼です。

狼は蒼に「お前の激しく汗をかく匂いと息切れしている

音が聴こえてきたから急いで駆け付けたぞ！」

すると猿の群れは遠くに隠れ、

ボス猿が遠くから言います。

「狼になんて助けて貰いたくないぞ。

喰われたらおしまいだ！」

すかさず狼が、

「俺は、蒼に命を救って貰った恩があるだけで、

お前たちなんてどうでもいいんだ」と言いました。

するとボス猿が

「わかった。力を貸してくれ」

と狼に頼みました。

狼は言います。

「さぁ！皆で力を合わせて、助けるぞ！」

今度は三本の蔦を使います。

狼の身体にも蔦を巻き付け、

そしてボス猿の大きな掛け声で大木を引っ張ります。

「ソーレ、ソーレ」

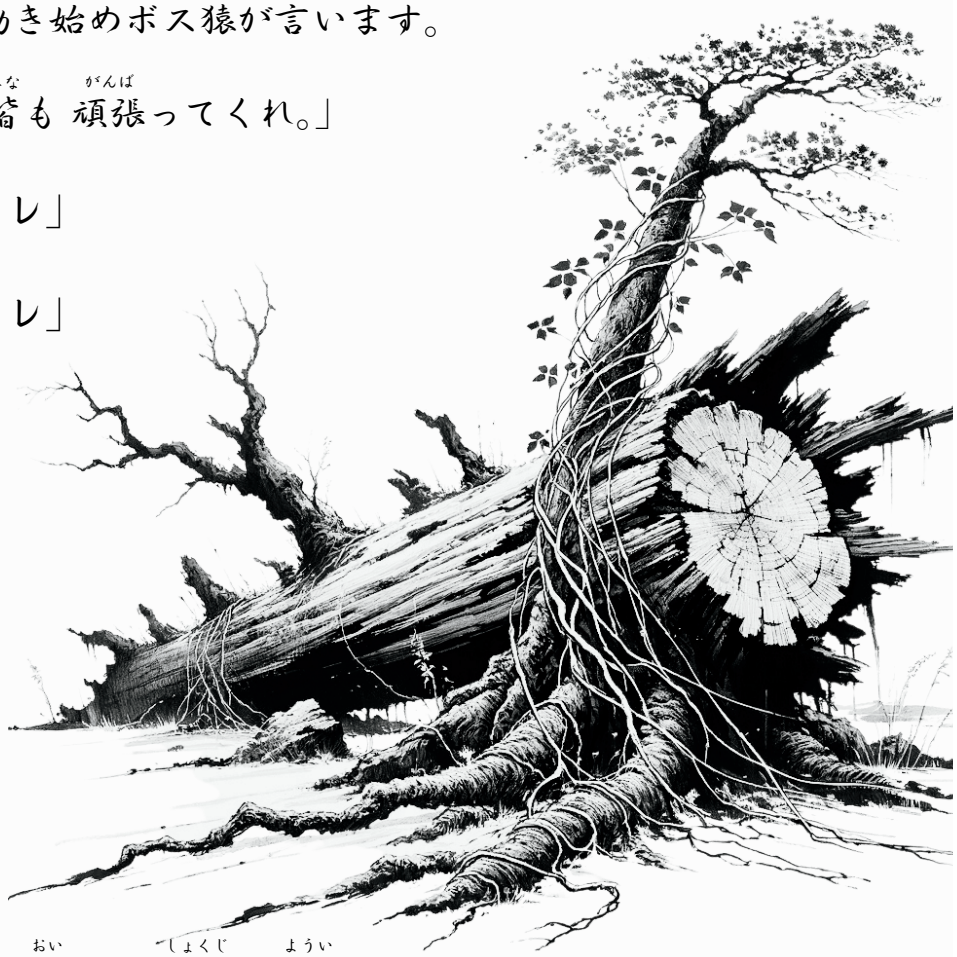
「ソーレ、ソーレ」

大木がゴロンと動き始めボス猿が言います。

「もう少しだ！ 皆も 頑張ってくれ。」

「ソーレ、ソーレ」

「ソーレ、ソーレ」



ついに大木を

動かすことに

成功しました。

子猿も無事です。

皆は大喜び！

ボス猿はお礼にと美味しい食事を用意してくれました。

狼とボス猿が仲良くしている姿を見て

蒼は幸せを感じました。

ある夜、蒼は夢を見ました。

よく長老たちから話を聞いていた僕が産まれた激しい

嵐の日の夢です。嵐が去ると山々は荒れ、住んでいた

動植物が半分になった様子を夢で見たのです。

蒼はハッと目を覚まし、すぐに山頂へと走り出しました。

そして、五感を研ぎ澄まし、三日後に僕が産まれた時の

ような激しい嵐が来ると感じました。

急いで長老たちに伝えます。

「僕が産まれた時のような激しい嵐が

三日後にやってきます。

どうしたら皆を守れるか教えて下さい」

長老たちはびっくりした様子で話し合いを始めました。

翌朝、長老たちが蒼に言いました。

「お前は産まれた時の酷い嵐を

五感で憶えているのかもしれんの」

「山のふもとに大きな洞窟があるわよ。
そこを避難場所として使うといいわ」

「あの嵐が来るということを
山々に住む皆に
伝えても信じて
貰えるじゃろうか」

「蒼はわしらの「五つの気」という教えをしっかり守り、
この山々やそこに住む動植物にたくさん尽くしてきたからの。
きっと蒼の言うことには耳を傾けると思うのじゃが」

「蒼や！お前は昔みたいに
わしらだけが家族じゃないからの。
この山々に住む全ての動植物が家族じゃ。
だから皆を危機から救うんじゃよ」

蒼の瞳には決意が感じられました。

そして長老たちに知恵を貰い、

早速、山々を駆け抜け叫びます。

「もう直ぐ嵐がやって来る！

だから山のふもとの洞窟に早く避難をしてください」

しかし、山々の動植物は蒼のことを信用していたものの、

突然のことで動かない動植物ばかりでした。

それでも蒼は動物たちに訴え続けます。

そうしていると蒼のもとに五つの長老たち、

蒼が人里から帰って来てからお世話になった動植物たち、

以前に出逢った親子狐の一族、河童の一族、

ボス猿の群れ、たくさんの仲間たちが集まってくれました。

仲間たちは言います。

「三日後に嵐が来るんだな。

急いで山々に住む動植物に知らせるぞ」

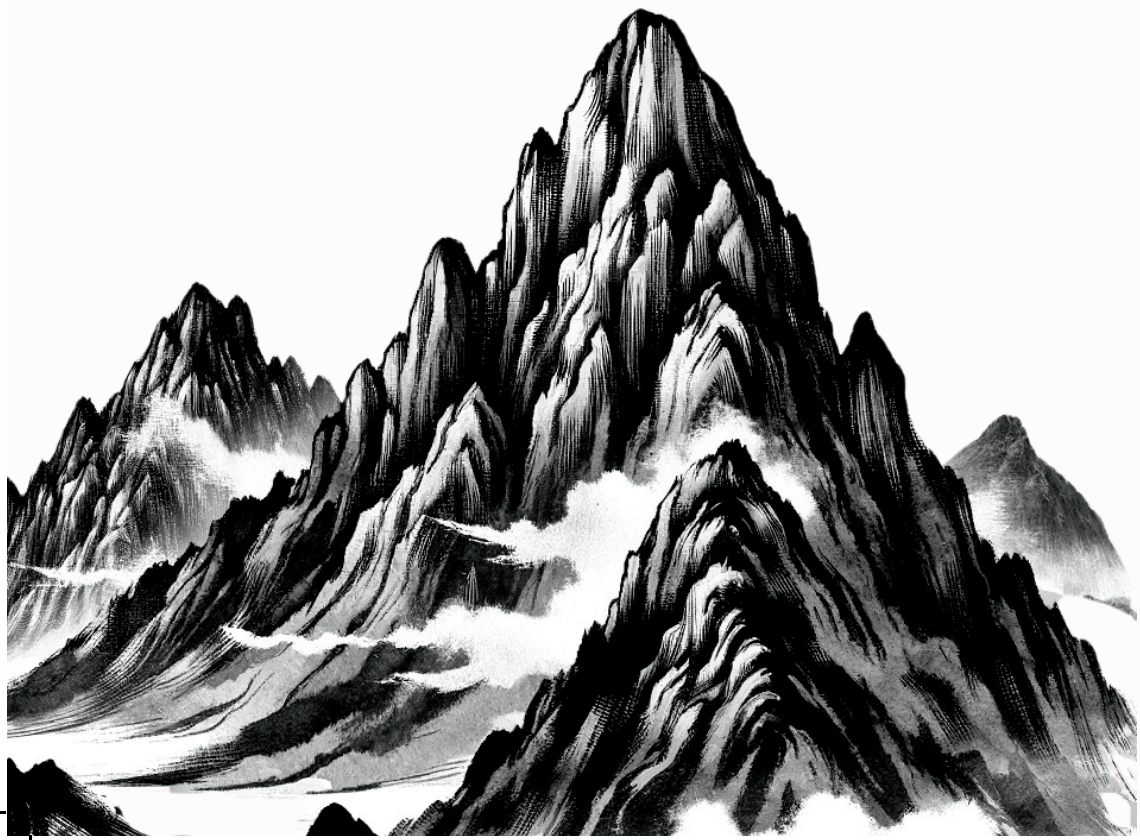
蒼は皆に指示を出していきます。

「狐さんたちとお猿さんたちは、山々の食べ物に詳しいから、
皆の一週間分の食料をたくさん集めてください！」

「河童さんたちは、水辺の動植物にこの危機を伝えてください！」

「長老様たちは、皆に避難するよう伝えてください！」

蒼は、身体の不自由な動物たちの所へ行き
避難をさせていきます。



二日目早朝、避難場所の洞窟に行くと、

山々に住む動植物が皆洞窟に避難していました。

蒼は思いました。

「皆が避難することを伝えてくれたから、

他の皆も避難を始めてくれたんだな」

そして、親子狐とボス猿に声を掛けられ

振り返るとたくさんの食料の山が出来ていました。

「もう一日で、もっとたくさん集められるから安心しろよ！」

とボス猿と狐が言います。

蒼は安心しました。

しかし、洞窟内では罵倒が飛び交っていました。

一週間近く肉食動物と草食動物が共に
生活をすることになるので、肉食動物が
草食動物を襲うのではないかと揉めていたのです。

蒼も予想をしていない事態に戸惑います。
そんな姿を見て長老たちも
「充分な食料も確保できているから大丈夫じゃぁ」
「同じ山々に住む動植物として
今は団結することが先決じゃ」と、宥めていました。
そんな論争は終わる様子もなく、
続いているので蒼は高台に立ち、伝えます。

「皆！今はそんなことを争っている場合じゃないだろ！

それに肉食動物は１０日間位なら何も食べなくても

生きていけるんだ！」

狼も言います。

「嵐が無事に収まるまでは、

動物を襲うことは絶対しない。約束をする」と

草食動物はザワザワしていましたが、

納得したようで各々の陣取った避難場所に戻って行きました。

蒼は狼に駆け寄り、お礼を言うと

「こんな時こそ助け合おう！っていうのを

俺はお前から教えて貰った。だからお前の事を信じるし、

当然のことをしたまでさ」と

蒼の頬を舐めました。

蒼はこの狼の気高さを

感じました。

いよいよ三日目の朝を迎えます。

山々の動植物の避難も終わり、一週間以上の食料が

山盛りに置かれています。

山々の動植物の諍いもなく穏やかな雰囲気が流れていました。

その様子を見て安心し、

蒼は洞窟の外へと向かいます。

洞窟の外の様子は、既に日が昇っている時間にも関わらず、
太陽の光が差し込むこともなく、空一面ドス黒い雲が
蠢いています。遠くからは雷の音が聞こえ、
稲光が蒼を照らします。
長老たちも蒼の側にやってきて言います。

「やはりお前の勘は当たりそうじゃの。
丁度お前が産まれた時の嵐が来る前もこんなんじゃったよ」

他の動植物も洞窟の入り口から
空や辺りを見渡し大きな嵐が来る気配を感じたようで、
不安そうにしていました。

蒼は洞窟を見渡せる高台に再度駆け上がります。

そして、

「皆！もう直ぐ嵐がやってくる。

でも安心してくれ。たくさんの食料もあるし、

たくさんの知恵をもった長老たちもいる。

だから皆で協力すればどんな困難でも乗り切れるからね」

そして続けて蒼は言います。

「僕のことを信じて避難してくれて、本当にありがとう。

僕は皆のことをずっと家族だと思っているからね」と

言って蒼は洞窟の入り口までゆっくりと歩きだします。

山々の動植物は蒼が何をしにいくのか見ていました。

洞窟の入り口に着くと既に強風が吹き、

大粒の雨が洞窟に吹き込んで来ています。

そしてゆっくりと後ろを振り返り皆に伝えます。

「この洞窟の入り口を塞がないと皆が安全に

避難生活を送れない。それに洞窟の入り口に蓋をする岩を

動かすことが出来るのは僕だけ。

嵐が過ぎさったら

この岩をどけるからね。

これは僕を育てて

くれた長老たちや、

皆への恩返しだよ」

と言って洞窟の外に出て

岩を移動させていきます。

その時、長老たちや山々に住む動植物は初めて気づきました。

蒼だけ嵐の中、外で過ごすことを。

「蒼〜！」

皆は理解し、呻くような声、泣き叫ぶ声、悲しそうな声で

呼ぶと蒼はもうすぐ岩で塞がる入り口の隙間から

満面の笑みで皆の方を見ました。

その瞬間、「ドスン」と大きな音と共に

洞窟の入り口が塞がれました。

蒼は嵐が来る予感がした時に何となく思っていました。

嵐の最後の日に産まれ、今回の嵐の時に自身の命が

尽きてしまうのではと。

しかし、蒼はそれでもいいと思っていました。

長老たちの言うことを聞かずに旅に出て辛い思いを

しながらも学び、そして長老たちから授けていただいた

『五つの気』を全うし、徐々に蒼への信用と信頼が寄せられ、

今では山々に住む全ての動植物と家族になれたのですから。

蒼は凄く幸せでした。

洞窟の中からは外の様子が分かりません。

ただ、洞窟内にいても雷の激しい音、

風が吹き荒れる音、雨が降り注ぐ音、

樹々が倒れる音、川が氾濫した音が聴こえてきます。

丁度一週間後の朝に

弱々しく岩を引きずる音が聴こえてきました。

「ズル……、ズル……、ズル……」

ようやく岩の扉が開き、山々の動植物も歓喜を挙げて

入り口に向かいます。しかし、山々の状況も酷く荒れて

いたことよりも蒼の姿を見て、皆は青ざめてしまいました。

身体中が怪我だらけであの絹のような

滑らかな白い毛は茶色く汚れ、所々皮膚が出ており、

身体も痩せ細り今にも息を引き取りそうな状況でした。

蒼は小さな声で「皆、無事だったかい？」と声を掛けます。

皆はそれに呼応するように

「蒼のお陰で無事だよ！」と聴いた瞬間、

蒼は使命を全うしたことに安堵の表情を浮かべ、

ゆっくりと蒼色の瞳を閉じ息を引き取りました。

長老たろが蒼の周りを囲み、

その周りに山々の動植物たろが囲み蒼を弔います。

この危機を乗り越えられたのは、全て蒼のおかげです。

感謝の気持ろと共に悲しみの気持ろに暮れ、

皆、涙を流しました。

長老たちが泣きながら言います。

「どうか蒼が産まれたお稲荷さんを祀った古いお社まで

運んでくれないじゃろうか。」とお願いをします。

そうすると荒れた山々で

歩きにくい中、

山々の動植物全員が

協力して蒼を運びます。

お社に着き、蒼をその前にゆっくりと寝かせます。

しばらくすると天界の方向から蒼そっくりの

絹のように滑らかで白色の毛をし、

瞳が海のように蒼い狐が二匹下りてきます。

そして、お社の前の蒼の身体は消え、

眩い光で彩られた身体となり、

二匹の狐と共に天界へと駆け上がって行ったのでした。

蒼が助けた子猿が、

「あれは蒼のお父さんとお母さんだね！ 逢えて良かったね。」

そう言うと皆も少し表情が緩みました。

その後、蒼の功績を称えてお社の横に

石像を作りあげました。

天界に召された後も蒼の碑のもとには、

たくさんの動植物が訪れ、お供えものが置かれるようになりました。

蒼が祀られるようになってからは、

あの酷い嵐は二度と来なかったようです。

企業理念

我々は、五つの『気』（樹　いつき）を大切にし、介護支援を行います。

気配り

我々は、感謝の気持ちを常に持ち
「気配り」ある介護支援を行います。

気遣い

我々は、笑顔で心のこもった「気遣い」
ある介護支援を行います。

気働き

我々は、「気働き」溢れる介護支援を行います。

一団和気

我々は、思いやりの精神を大切にし
「一団和気」の環境を育みます。

意気

我々は、「意気」に富んだ人財を育成致します。

株式会社樹
代表取締役　樋尾重樹

出版：株式会社フォルム